

平成23年4月

平成22年度
川崎市市民ミュージアムの
運営・活動に関する評価報告書

川崎市市民ミュージアム運営・活動評価委員会

◇資料

- 川崎市市民ミュージアム運営・活動評価委員会（評価委員会）の
開催経過
- 評価委員名簿

1. 総評

2. 22年度 重点項目、展示上映等評価シート
(内部評価・評定意見・評定)

◇資料

○評価委員会の開催経過

- 平成22年 7月12日：22年度第1回委員会
 - ・22年度評価シート（案）の審議・承認
- 平成23年 1月28日：22年度第2回委員会
 - ・事前に館内で行った内部評価をもとに、22年度の事業・活動について内容を確認し、委員間で意見交換
- 平成23年3月～4月
 - ・委員会会長が各委員の評価・評定意見をとりとまとめ、内容を各委員に確認後、評価報告書を作成

※本年度は、評価結果をできるだけ速やかに次年度以降の運営・活動に活かしていくために、年度中に報告書を作り上げることを目指し、3月16日に第3回委員会を開催して評価・評定意見を集約する予定であったが、地震の影響で当日および年度内の開催が不可能になったため、メール等により意見集約を行っての作成となった。

○評価委員名簿

●川崎市市民ミュージアム運営・活動評価委員会 委員

委員名	現職	備考
今村 有策	東京都参与／トーキョーワンダーサイト館長	
内田 欽三	専修大学経営学部教授	副会長
大月 ヒロ子	有限会社アイデア 代表取締役	
草壁 悟朗	川崎信用金庫専務理事	
小林 美和	市民ミュージアム協議会委員	
杉長 敬治	京都工芸繊維大学研究推進本部教授	会長
林 容子	尚美学園大学芸術情報学部准教授	
宮澤 壯佳	池田満寿夫美術館顧問（元美術手帖編集長）	

（五十音順 敬称略）

1 総評

<平成22年度の評価活動報告>

川崎市市民ミュージアム（以下「市民ミュージアム」）では、平成20度から外部の評価委員による評価制度を導入した。評価制度が導入されてから平成22年度までの3年間、8名の評価委員と市民ミュージアムの職員の協働により評価活動を行ってきた。平成22年度は、現行のメンバーによる評価の最終年度になる。

○平成22年度の目標達成状況

平成22年度において、市民ミュージアムでは、館長以下全職員及びボランティアなど館を支援する関係者並びに外部の多くの個人・機関の力により、市民ミュージアムが設定した目標をおおむね達成し、ミュージアム事業としての価値を多数創成し、川崎市民を始めとする市民ミュージアムの利用者に提供したと認められる。

一方、ミュージアムへの市民の期待が多様化・高度化する中で、市民ミュージアムにおいても、事業運営において改善すべき点や今後取り組むべき課題が数多く見受けられた。これらの点については、「重点事項として取り組む施策（実施目標）」の項目毎に整理し、市民ミュージアムに示した。市民ミュージアムにおいては、指摘した内容を十分検討し、市民ミュージアムの更なる充実に向けて計画的に取り組んでいくことを強く要望する。

<今後市民ミュージアムの改革を継続するに当たって>

○市民ミュージアムの改革力

平成20～22年度の3年間にわたる評価活動期間中において、市民ミュージアムの事業の遂行能力は次第に高まってきたものと考ええる。また、市民ミュージアムを核に、多くの人々と組織が連携する動きが顕著になってきた。市民ミュージアムは、歴史、考古、美術、映像など多様な資料を多数有するとともに、各種の事業を着実に実施する人材を保有しており、市民ミュージアムの改革を更に進めていくために必要な力をもっていると考ええる。

○今後の目標；充実強化すべき機能・役割

川崎市は、製造業主体の都市から世界有数の先端技術産業都市へと変貌しつつある。産業構造が大きく変貌する中で、川崎市では、都会の中に残る豊かな自然と文化資源をいかして、「音楽のまち」「映像のまち」「スポーツのまち」づくり、魅力ある都市づくりを進めようとしている。川崎市の進めている諸政策を推進していく上で、市民ミュージアムへの期待と役割は大きい。

市民ミュージアムには、これまで社会教育施設として担ってきた機能や役割にとどまらず、以下の点が期待されている。

- ①市民を始め国内外の多くの人々が新たな価値を創造するための拠点
- ②新しい、多様な情報を発信する拠点
- ③世の中には多様な価値観が存在することを知らしめる場所

④市民を相互に、また市民を国内外の人々をつなぐ場所

⑤川崎市の〈顔〉としての機能・役割を果たすこと

○今後の目標；異彩を放つミュージアム

市民ミュージアムのカバーする事業は、我が国の博物館の中でも群を抜いて多岐にわたっており、多くの展覧会や映画上映が実施され、市民ミュージアムの多様性を形成している。市民ミュージアムの多様性は高く評価できるが、反面、市民ミュージアムがどのような存在であるかをわかりにくくしている。市民ミュージアムでは、多様性を館の特徴としながらも、全国の博物館の中でも異彩を放つ、高い優位性をもつ領域・分野と事業運営のスタイルを形成し、保持することが必要である。市民ミュージアムの性格や事業を一言で表現することは難しいとしても、ミュージアム、ミュージアムの運営スタイルを簡潔に言い表せるものにしていくことは、館の認知度を高める上で、また、館のマネージメント能力を高めていく上で重要なことである。

○今後の目標；ひろく支持されるミュージアム

国や地方公共団体の財政状況が悪化する中で、存亡の危機にある公共施設、公的文化施設が増えている。事態は更に厳しさを増していくものと思われる。市民ミュージアムにおいては、川崎市民はもとより広く国内外の人々に向けて、存在意義をアピールし、更に魅力的な博物館となり、川崎市民からひろく支持されることが不可欠である。

○改革に向けて必要なこと

市民ミュージアムの更なる改革には多くの困難を伴うことから、市民ミュージアムと設置者である川崎市には、的確な戦略の策定と真摯で持続的な努力の積み重ねが求められている。

評価委員会としては、以下の取り組みが行われることを強く要望する。

- ①川崎市を目指す方向に十分留意して、市民ミュージアムの〈立ち位置〉を明確にし、市民ミュージアムの特色を一層鮮明にすること
- ②今後の事業計画・アイデアを策定するに当たっては、これまでの評価結果を十分踏まえて、市民ミュージアムの総力をあげて策定し、優先順位を明確にして取り組むこと
- ③厳しい財政事情の下ではあるが、改革を進めるに当たって不可欠な市民ミュージアムのリソース（資料、人材、施設等）を充実すること
- ④市民ミュージアムの改革は単独ではなしえないことを十分認識し、市民その他の参画を積極的に図るとともに、外部とのネットワークの充実強化を図ることにより、外部からの支援・協力を積極的に得ること
- ⑤館の認知度を高める至上の各種の事業を企画・実施するために、広報体制の抜本的改革を図っていくこと

平成23年度には、就任以来、市民ミュージアムの改革のために尽力されてきた志賀館長の後任の館長が新たに就任される。新館長の下、市民ミュージアムが更に飛躍していくことを大いに期待したい。

<東日本関東大震災の発生を踏まえて－震災に強いミュージアム>

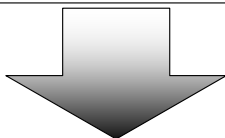
平成22年度の評価結果をまとめている最中に、未曾有の大震災が発生した。震災は、現在も市民生活に大きな打撃を与えつつある。このたびの大災害は、我々が想定してきたものより大きな災害が突然起きることをあらためて示した。これまでも災害が発生する毎に、市民ミュージアムでは、必要な取組みを講じ、将来の災害に備えて準備をしてきたものと思うが、あらためて災害に強いミュージアムを構築するために、全力で取り組んでいくことを強く要望する。また、川崎市が、その取組みを積極的に支援していくことも強く要望する。

22年度 重点項目評価シート

川崎市文化芸術振興計画の基本方針

- | | | | |
|------------------------------|---------------------|------------------------------|---------------------------|
| 1. 文化芸術振興による創造的で持続的なまちづくりの推進 | 2. 市民の主体的な文化芸術活動の尊重 | 3. 関係機関等との連携による文化芸術の振興と地域づくり | 4. 文化芸術活動を通じた都市・地域間の交流の推進 |
|------------------------------|---------------------|------------------------------|---------------------------|

- 22年度の市民・こども局の組織目標
(文化施策に関する項)
4. 文化芸術・スポーツの振興による魅力あるまちづくりの推進



3段階評定

- A: 目標を十分に達成し、成果をあげている
B: 目標を概ね達成している
C: 目標を十分に達成しておらず、改善が必要である

市民ミュージアムの重点目標	重点施策	実施目標(到達レベル)	内部評価(自己点検)		外部評価		
			事業実績	成果と課題	評価できる点	今後取り組むべき課題等	評定
I. 文化芸術振興の拠点機能の構築(市民・こども局への移管効果を具現化)	(1) 拠点機能構築に向けての方針と計画を策定	(1) 「今後3年間の取組方針」の中に含めて検討を進め策定	(1) 「今後3年間の取組方針」において市民ミュージアムがめざす姿を、「川崎を全国に発信」「市民文化の伝承と創造」「地域の活性化に貢献」する拠点と位置付け、その実現に向けての取組みを今後3年間のスケジュールも含めて計画	(1) 【成果】市の第3期実行計画の中に計画が位置づけられる【課題】着実に実行していくための市民ミュージアム内の体制整備と関係部署とのさらなる連携の強化	○市民ミュージアムの設置者である川崎市の「川崎市新総合計画(第三期実行計画)」において、市民ミュージアムのめざす姿(市民から親しまれる魅力ある博物館)がうたわれたことを評価する。	○「川崎市新総合計画」に基づいて、市民ミュージアムがどのような事業計画を策定し、実行していくのが問われる。市民ミュージアムにおいては、川崎市の地域の特性と市民ミュージアムの個性を踏まえた意欲的な事業計画を策定し、着実に実行していくことを期待する。そのためには、市民ミュージアム内の体制整備が極めて重要である。また、市当局においては、市民ミュージアムと十分協議し、「川崎市新総合計画」において定めた事項の実現に市民ミュージアムが貢献できるように設置者として積極的に支援することを期待したい。	A
	(2) 市内の文化芸術施設や「映像のまち」「音楽のまち」など関係機関との連携の強化とネットワークの構築	(2) 各施設・機関と定期的な情報交換の場を設定し、連携事業を検討・実施	(2) ・市民ミュージアムや映像のまち担当、音楽のまち担当など市の文化関係の施設・機関を所管する市民文化室の管理職及び各広報担当者の会議を定例実施 ・同じ局のシティセールス、スポーツ文化室との連携強化 ・民間も含めた市内の博物館施設と連絡会議を実施 ・ミュージアム川崎で市民ミュージアム収蔵品による展示会を実施 ・毎日映画コンクール連携で、過去の受賞作品を特集上映 ・「まど展」での校歌・園歌をうたうイベント、多摩高合唱部の演奏会、逍遥空間でのミニコンサートなどを実施 ・4月に開館した登戸研究所資料館に働きかけ、市域博物館連絡会への参加を実現、また開館にちなみ講演会と関連映画上映を実施 ・競技場・アリーナで開催のスポーツイベントと連携した観覧料無料サービスを実施	(2) 【成果】文化室各担当との媒体共有、及び市の広報媒体への掲載頻度の増加などにより、広報露出機会が拡大 ・市や地域に関わるイベントに連動した事業展開により市の文化施設としてのアピール力が向上【課題】文化芸術を活かしたまちづくりに貢献に向けての機能強化	○他の施設・機関と戦略的に連携する取り組みが不十分な博物館が多い中、市民ミュージアムでは、市の文化芸術施策の中に位置付けられた事業を中心に、連携に成果をあげたことは大きいと評価できる。「毎日映画コンクール」の連携企画で、過去の受賞作品を特集上映するなど、市民ミュージアムらしさを発揮した連携事業を実現した。	○市民ミュージアムのミッションの実現に当たって、他機関との連携が効果を発揮していくためには、連携の目的、内容、連携先の選定等において、より戦略的であることが重要である。川崎市が設置する美術館等の文化施設を始める市内の各種施設との連携、中原区等の各々地区にあるスポーツ施設等の連携も、これまでの実績を踏まえ、一層強固なものにしていくことが重要である。 ○市民ミュージアムの事業の質を一層高めていくためには、優れた実績をあげている他の博物館、美術館や大学その他の学術研究機関との連携を積極的に図ることが期待される。	A
	(3) 映画大学開校に向けて相互協力の具体策を立案・協議	(3) 映画大学の設置認可(10月予定)以降、大学側と協議を開始し年度内で成案	(3) ・具体策の協議は映画大学の認可遅れや開校準備繁多のため持ち越し ・文部科学省からの映画大学設置認可を、市民ミュージアムを会場としてプレス発表 ・映画大学開校に連動して、日本映画学校の過去の卒業制作作品を特集上映	(3) 【課題】「映像のまち」と連携して、川崎の発信に結びつく具体的な施策を大学側と協議し、あわせて館としての協力体制を整備	○連携の中でも重要な項目とされている「映像のまち」に関しては、平成23年度中に日本映画大学との連携を着実にスタートさせることが重要である。市民ミュージアムと日本映画大学の間で連携の企画・実行を図るための組織を整備した上で、連携の在り方を十分協議し、確実に実行できるプランを策定することが重要である。開学直後の日本映画大学の運営が軌道に乗るまでの間は、市民ミュージアム側から積極的に提案していくことが望まれる。また、連携が効果をあげるためには、映画を媒介にした連携事例を十分研究し、連携の内容や方法を実効性のあるものにしていく必要がある。	A	

市民ミュージアムの重点目標	重点施策	実施目標(到達レベル)	内部評価(自己点検)		外部評価		
			事業実績	成果と課題	評価できる点	今後取り組むべき課題等	評価
Ⅱ. 都市川崎と市民ミュージアムを全国に発信	(1) 集客力や話題性のある事業の立案、実施	(1) ①市民ミュージアムの特徴、機能を活かした事業展開により、総利用者数や企画展・映画観覧者数の対前年プラス ②話題性や時機を得た事業の企画やシテールズとの連携強化によるメディア露出頻度の拡大 ③「映像のまじ・かわさき」をアピールする事業の実施 ④川崎発の国際的な近現代美術展開催の検討	(1) ①川崎ゆかりの詩人「まど・みちお展」、収蔵品を活用した毎年恒例の「昔のくらし 今のくらし」、テーマ設定に工夫をこらした映画の定期上映その他により、実績は総利用者数170,944人(前年172,853人)、企画展入場者数69,682人(前年82,693人)、映画入場者数14,132人(前年12,471人) ②、若年層に支持される新進漫画家「横山裕一展」は日曜美術館で紹介 ③日本を代表する川崎ゆかりの詩人「まど・みちお展」では皇后陛下行啓により新聞・放送メディアが多数取材 ④「昔のくらし 今のくらし」で前回好評の学校給食を新たな切口で復元提供 ⑤NHK首都圏ネットワークの特集「文化のいま」で公共施設活性化の事例として取材を受け放送 ⑥監督、俳優、原作者などテーマ設定に工夫をこらした映画の定期上映。上映作品の関連イベントとして山田洋次、篠田正浩を招いてトークショーを開催 ⑦毎日映画コンクール表彰式開催に連動して過去の受賞作品を上映	(1) 【成果】企画展入場者数が昨年より減少している中、多様な事業展開により総利用者数は2月末まで昨年並みを維持したが、3月に地震の影響で前年同月2千人減 ⑧皇后陛下の行啓やNHKの放映をはじめ、局内連携による露出拡大、ネット広報の工夫などにより市民ミュージアムの存在をアピール【課題】集客力のある企画展の立案や目標の達成をマネジメントしていく仕組みづくり ⑨川崎発の国際的な近現代美術展の検討は開館25周年に向けての今後の課題	○多様な企画展その他の展示や映画上映、様々なイベントの実施により、平成22年度とほぼ同様の入館者数を確保できた。我が国の人口構造の変化(少子高齢化、人口減)や昨今の不況、夏の猛暑などにより、全国的に博物館、美術館の入館者数が伸び悩む中、一定の入館者数を確保できたことは、まずまずの成果と言える。 ○内容面で斬新な展覧会が幾つか見られた。 ○「横山裕一展」では、展示デザインにおいて実験的な試みが行われ、既存の展示空間の再読み取り、再編集がなされた。また、会場内の写真撮影と写真のブログでの公開許可は、現存作家の展覧会としては、例の少ない新たな取り組みであった。広報グラフィックデザインや漫画という、その時代を生き生きと映し出す分野を扱う館として、斬新なアプローチは館の使命であり、大いに評価したい。残念ながら、飛躍的な入館者数の増加には結びつかなかったが、インターネットを使用した広報にも工夫が見られ、市民ミュージアムが他の博物館にない、独特の企画や運営を行っていることが各種メディアにとりあげられたことを評価する。	○斬新で、多様な企画展が一定数開催されているにもかかわらず、目に見えて入館者数が増加することはなかった。この要因を十分解明し、有効な対策をうつことが必要である。とりわけ、展覧会の水準の割に、アピール度が低かった展覧会については、問題点を十分解明し、次の企画に際して、教訓として活用できるよう館の知的資産としてストックしておく必要がある。 ○館のシンボルとなる展覧会、他の展覧会よりも資源を投入した展覧会を、毎年(毎年無理であれば一定間隔で)、ほぼ同時期に開催し、シリーズ化することにより、館の個性・特徴をアピールしていく展覧会戦略の構築が必要である。館の個性・特徴を体現した展覧会により、川崎市内、神奈川県内の他に、首都圏からの集客が可能になる。館の個性・特徴を活かした展覧会企画を継続することにより、回を重ねる毎に質的な向上が期待できるとともに、観客の認知度が高まり、集客につながりやすくなるなどの効果も期待できる。恒例・定番の展覧会を創出することで中核となる事業ができることにより、他館では試みられていない実験的な、自由度の高い事業への取り組みが可能になると考える。 ○展覧会のターゲット毎に、大胆な企画(例: 若者のカルチャーや流行をテーマにする、若手作家の継続的な紹介)を実施することが望まれる。	B
	(2) きめ細かな広報戦略の策定とネットの活用による発信力の強化	(2) ①集客に貢献する媒体展開の立案・実施 ②HPアクセス数の対前年プラス	(2) ①「横山裕一展」において専用ブログ・専用ツイッターなどネット広報を充実し、あわせて会場撮影をフリーにしたことによりブログアップが増える ②文化室主催の広報担当者連絡会参加など、局内連携により市報その他に掲載拡大。情報誌「散歩の達人」掲載の庁内コンペでミュージアム案が採用され掲載 ③ページビュー724,312(前年同期間824,344)、ビジター数99,955(同104,359)	(2) 【課題】各種媒体の効果的な展開やHPの活用を含めて、新たな広報戦略の立案	○市民ミュージアムのホームページは、情報量も多く、デザインも斬新なこともあって、アクセス数が一定数確保されていることを評価する。 ○企画展の専用ブログやツイッターなどの取り組みを継続することを期待する。	○広報担当職員を配置し、これまでの広報戦略を抜本的に見直し、広報内容やターゲットに適合した広報形態を確立していくことが重要である。 ○ポスター、ちらし、駅ビルボードなどの公共広告の充実に取り組むことは言うまでもないが、今後更に中心的なメディアになっていくと言われているツイッターやソーシャルネットワークによる展覧会やイベントの告知に積極的に取り組んでいくことが重要である。 ○通常のプレスリリースの他に、館が重点的に取り組む事業には、プレス向けの内覧会を実施することが望まれる。また、マスコミ関係者との定期的な懇談会の実施も、改革に取り組んでいる市民ミュージアムの理解を促進する上で、即効性はないものの、中長期的に見て効果がある。	B
	(3) 収蔵品の活用と全国発信	(3) 館の企画展として横山裕一展や木村伊兵衛35周年記念展、館収蔵品の貸出しによる濱田庄司展の開催等	(3) ①企画展、映画上映では収蔵品を活用した事業を多く展開し、ミュージアムの活動を発信 ②砺波市美術館で当館収蔵の作品を中心に構成した濱田庄司展の開催 ③ミュージアム収蔵の映像資料で構成するNHKの番組(半藤一利が語る昭和史)の制作、放映 ④文化庁メディア芸術デジタルアーカイブ事業に参加	(3) 【成果】市民ミュージアムのコレクションの対外的なアピールの機会は着実に拡大【課題】事業展開を通して、ミュージアムの特色と収蔵品の多様性を発信しているが、特に企画展の展開でそれが伝えられていないため、広報戦略の見直しを図る	○ミュージアムのコレクションの貸出など、館のコレクションを対外的にアピールしている活動を行っていることを評価する。	○コレクションの一部は、館のホームページでの公開など積極的に公開に取り組んでいるが、多岐にわたる館のコレクションの全貌は、市民に明確に伝わっているとは言えない。館内にコレクションの概要を伝えるボードの掲示を掲出するなどコレクションの周知に取り組むことが必要である。 ○国内の他の博物館との「交換展」など市民ミュージアムのコレクションと他館のコレクションを有効に活用した、質の高い展覧会の企画を期待する。また、アニメ、写真、現代美術などの分野で国外、とりわけアジア諸国との「交換展」の実施にも取り組んでほしい。	B
	(4) 魅力発信のための基盤整備として施設・設備改修への取組みを推進	(4) 本年度予定の空調設備の改修調査、映写設備の改修を進めるほか、「今後3年間の取組方針」の策定により今後の市民ミュージアムの方向性を定め、市民ミュージアムの魅力向上の視点で常設展示場の改修、映像ホールの整備、空調設備の大規模改修の実現に取組む	(4) ①映像機器の改修を3月に実施 ②空調設備の大規模改修の予算を申請し承認 ③常設展示場や外壁ほか施設・設備など多額の資金を要する改修については、サマーレビューで今後の市民ミュージアムのあり方をプレゼンする中で説明 ④第2次改革計画に盛り込み内容、時期等は今後の検討	(4) 【成果】空調設備改修の実現、来年度から4年計画で実施【課題】常設展示場や外壁などの大規模改修は今後もその必要性を強くアピール	○常設展示場の改修、映像ホールの整備、空調設備の大規模改修の実現に取り組むことは、館のミッションを実現する上で必要不可欠なものである。市民ミュージアムと設置者の川崎市が、空調設備の改修調査、映写設備の改修を進めていることを高く評価する。	○開館時のままの常設展示場(歴史・民俗展示)のリニューアルには、できるだけ早期に取り組むことを期待する。 ○館のイメージアップと利用者の利便性の向上の観点から、ミュージアムショップやトイレの改修にも、計画的に取り組むことを期待する。	B

市民ミュージアムの重点目標	重点施策	実施目標(到達レベル)	内部評価(自己点検)		外部評価		
			事業実績	成果と課題	評価できる点	今後取り組むべき課題等	評価
Ⅲ. 市の美術文化の特色、及びその担い手の発信と支援	(1) 市ゆかりの芸術家の発信	(1)①「まど・みちお展」をはじめ、企画展・常設展・映画上映で市ゆかりの作家を紹介し、川崎の文化を全国に発信 ②市ゆかりの芸術家の作品・資料の収集・調査	(1)・「まど・みちお展」を開催 ・埋もれた日本画家石渡風古の作品調査の実施と川崎大師での展覧会開催 ・「佐藤惣之助展」をアートギャラリーで開催、その後川崎区役所、川崎今昔会(川崎区の市民団体)と協力して川崎駅前のアートガーデンで開催 ・松竹の看板女優として人気を博した川崎ゆかりの女優川崎弘子の映画を特集上映 ・来年度の企画展開催に向けて実相寺昭雄氏の寄贈資料の調査を継続	(1)【成果】機会を捉えての事業展開により、「市の美術館」としての役割を果たす 【課題】企画展開催後も実相寺昭雄氏の寄贈資料の整理と調査及び公開	○企画展・常設展を通しての川崎市にゆかりのある芸術家・作家の紹介や川崎市の歴史文化に関する調査研究、関連資料の収集、展示が積極的かつ継続的になされていることを評価する。	○川崎市ゆかりの芸術家・作家について市民ミュージアムが積極的にとりあげていることについて、市民に一層周知する必要がある。 ○芸術家・作家と川崎市との関連については、幅広く柔軟に考えることが望まれる。様々な世代の視点を取り入れて、多様な視点からとりあげることが望まれる。評価の定まった芸術家・作家の他に、新しい人物の新たなテーマの発掘を積極的に推進していくことを期待したい。	B
	(2) かわさき市美術展の改善	(2)①市民文化室との連携により前年の改善点を深化、定着 ②市美展を発展させた新たな美術・芸術展を目指して、運営委員会で見直しを提案しスケジュール化	(2)①・昨年の反省を踏まえ、道遥展示空間の展示を縮小し企画展室に振替え ・中高生部門のエントリーをより発展、推進させるため市立、私立のみならず県立高校にも案内を発送 ②市美展は、市民ミュージアムの今後のあり方と関連付けて見直しを検討	(2)【成果】入場者数は8,774人(前年7,825人)で前年に引続き会場変更が市美展の認知に寄与 【課題】・応募者数264人(前年309人)、応募作品数421点(前年498点)といずれも減少 ・応募者年齢層は60・70歳代が3分の2でこれまでの傾向とかわらず ・川崎の魅力を生内外に発信する市民参加の美術展としての見直しを23年度から着手		○「川崎市美術展」は、参加者の高齢化や固定化、市民への浸透度の低さ等、多くの課題を有している。市民ミュージアムで開催するに当たっては、市民ミュージアムとしてどのように関わっていくのか、市民ミュージアムが関わることで、美術展にどのような改革をもたらすのかについて十分検討することが重要である。これまでの「美術展」をそのまま行うのではなく、新しいジャンルの創設も含め、市の内外に積極的に発信するものをもつ美術展になるよう方向性を定め、可能性とエネルギーをもつ美術展になるように、市民ミュージアムが推進力になっていくことを期待したい。	B
Ⅳ. 市の歴史文化の保存と活用、及びその継承と発信	(1) 常設展における収蔵品の活用	(1) マンスリー展示により広く収蔵品を公開	(1)・月毎に近現代の歴史も対象としてテーマを定めて寄贈品や新たな収蔵品を展示し年間12回実施 ・市民ミュージアム所蔵の下原遺跡縄文時代後・晩期出土品が川崎市重要歴史記念物に新指定されたことを記念して、常設展示場内でミニ展示会を実施		○歴史・民俗部門のコレクションの展示については、リニューアルが難しい中で、「マンスリー展示」というスタイルで工夫しながら展示していることを評価する。	○市民ミュージアムが川崎市民の記憶を共有する場所として広く市民に認識されることを期待する。「マンスリー展示」は、地味ながら、重要な方法のひとつであり、今後も力を入れて取り組んでほしい。また、「マンスリー展示」を集約するような企画展の開催も検討してほしい。	B
	(2) 収蔵品の保存と充実	(2)①収蔵品の修復を進め、「絵図展」などで公開 ②川崎の近現代展示を見据え、産業資料を含めた近代資料の収集を積極的に推進 ③大師電気鉄道の開業時の車両模型を製作	(2)①多くの市民から寄贈を受けこれまで調査・修復を進めてきた川崎市域の江戸時代の絵図により企画展を開催、100点以上の収蔵絵図を展示 ②鋭意収集を行い、その一部はマンスリー展示で、「万博の頃」「川崎の町村合併」「多摩川の橋」などのテーマで公開 ③車両模型を完成 ④大師電気鉄道の開業時の車両模型を製作 ・鶴見大学保有の分析機器を利用して市民ミュージアム所蔵考古資料の共同研究を実施する覚書を締結	【成果】機会を捉えての公開により、歴史的資料の収集・調査・保存という博物館の基本的な役割をアピール ・企画展としての開催により、市内の村々についての絵図集成的な図録ができる 【課題】・予算の制約から、修復できない資料が多数ある ・学校への出前事業については、教育普及担当との連携による積極的な学校側への働きかけが必要	○収集・保管している資料を少しでも多くの市民に見てもらうために、館の外に出前展示や出前授業を積極的に実施していることを評価する。	○人口の高齢化が進む中で、今後も資料を寄贈していただく機会が増えることが予想される。収蔵スペースの確保に加え、資料を寄贈していただくための方策の積極的な検討と取り組みが期待される。	A
	(3) 出前展示や出前授業での収蔵品の活用	(3)①鷺沼小(宮前区)・川中島小(川崎区)・柿生中(麻生区)で考古資料の展示を行い、あわせて授業も実施 ②出前展示を通して、文化財課との連携をさらに深める	(3)・柿生中の新資料室の考古資料展示に協力、川中島小での展示は、23年度に変更 ・出前事業は2校で実施 ・品川歴史館の特別展「中原街道展」に資料協力		○収集・保管している資料を少しでも多くの市民に見てもらうために、館の外に出前展示や出前授業を積極的に実施していることを評価する。	○川崎市は、東京23区と横浜市に隣接し、渋谷や横浜に向かう交通網はよく整備されている。一方、市民ミュージアムの設置場所に関しては、市内全域からの来館を図る上での交通インフラは決して十分ではない。館外での活動は重要であり、その活動実績を広くアピールすることが重要である。 ○学校における市民ミュージアムのニーズを十分把握し、市内の小中学校に働きかけることにより、出前授業などの学校でのアウトリーチ活動を更に展開してほしい。 ○人口の高齢化が一層進展する中で、高齢者を対象とした出前プログラムの可能性も検討することを期待する。	A

市民ミュージアムの重点目標	重点施策	実施目標(到達レベル)	内部評価(自己点検)		外部評価		
			事業実績	成果と課題	評価できる点	今後取り組むべき課題等	評価
V. 地域活性化への貢献	(1) 市民団体、教育機関ほか地域の各種団体(文化団体、NPO法人、郷土史会、企業など)との連携、協働を推進	(1) これまでの連携実績がある諸団体に加え、新たに東京ガラス工芸協会との展覧会・普及事業の実施、川崎の産業関係団体との連携事業を検討	(1) 川崎おやじ連おやじの会、多摩川野焼き土器づくり会など実績のある団体に加え、川崎今昔会(佐藤惣之助展)、中原アンストクラブ(小杉新住民への地元案内)、国際ソロプチミスト川崎(小杉駅のミュージアム案内看板修理補助)、登戸研究所資料館(講演と映画上映)、民俗文化研究所(映画上映)などと連携し協働事業を実施 ・経済労働局と連携し産業関係ツアーの受入やガラス工芸研究所の展覧会を開催 ・経済労働局や環境局の職員の参画により、「市民ミュージアム活用検討会」を開催、観光・産業視点でミュージアムの新たなコンテンツを検討 ・中原区役所の事業に協力しエコカフェを中庭で実施	(1) 【成果】昨年度に引き続き機会を捉えて様々な団体、市の関係部署との連携を志向したことにより、市民ミュージアムの活動の理解と認知の拡大を図ることができ、集客にも貢献 【課題】連携事業の内容がマンネリにならないよう新たな方向性の検討が必要 ・「活用検討会」では今後ミュージアムとしての考え方を整理し、可能性を追求	○公立のミュージアムとして、地域社会から期待される機能のひとつに地域の各種の団体や文化資源を結びつける機能がある。市民ミュージアムが各種団体との連携、協働に本格的に取り組むようになってから、比較的短期間で連携・協働が軌道に乗りつつある。点から線になり、面になっていく展望も見えてきたと考える。現時点で、市民ミュージアムの特色のひとつになりつつあることを評価する。	○公立のミュージアムがミッションを達成していく上では、各種団体との連携・協働は不可欠との認識をあらためて確認し、これまでの積み重ねを大切にしながら、連携・協働の質的向上と新たな展開に向けて努力してほしい。 ○日本を代表する産業都市という歴史をもつ川崎市の特徴をアピールするために、教育・文化団体等だけではなく、産業関係団体や企業等との積極的連携していくことが極めて重要と考える。常設展示の部分に、戦後の高度経済成長を支えてきた産業都市川崎のすかたを表象する展示を今後整備することが期待されるが、その点においても、産業関係団体等との連携は、市民ミュージアムの重点事項として取り組んでほしい。	A
	(2) 市民ミュージアムの特徴を活かした教育普及プログラムの充実による、参加型の教育普及事業の強化	(2) 「夏休み子どもミュージアム」や博物館部門の歴史講座・歴史探検ツアーを実施するほか、スクールプログラムの充実により学校利用、普及事業参加者の対前年プラス	(2) 学校連携の各展覧会は昨年同規模で定例化して実施 社会科推進事業の参加校、参加人数は昨年実績を維持 ・学校連携事業として、新たに川崎市総合教育センターの10年経験者研修や「輝け☆明日の先生の会」研修が市民ミュージアムを会場として開催され研修プログラムに協力 ・小中学生を対象に、夏休み中の子どもたちを受け入れる場として5つのプログラムで「夏休み子どもミュージアム」を実施 参加者合計305名 子ども197名 大人108名 ・スクールプログラム支援学級の受け入れ、体験プログラムの実施 策を昨年に引き続き実施 ・大人を対象にバックヤードもみせるミュージアムツアーを実施 ・横浜国大と連携して障害のある方も参加できるワークショップを実施 ・「親子映画会」の実施 通常の映画上映とは別の切り口による、所蔵16ミリ映画フィルムを用いた上映会を開催し、新たな収益事業を立ち上げ 参加者 37組 82名 ・「版画講座(リトグラフ)」・施設の活用 参加者 12名	(2) 【成果】これまでの学校連携事業に加え、10年経験者研修なども取り入れることができ、教育普及事業の今後の可能性が広がる 【課題】10年経験者研修や「輝け☆明日の先生の会」研修は来年度以降も実施する中で、総合教育センターとの協議し内容の充実を図る ・歴史講座などは多くの参加者があるが、比較的参加者が重複する場合も多く、新たな参加者の獲得のためにも広報の工夫が必要 ・プログラムの拡大と充実、受入人数や夏休みの子どもも対象のときの時間設定など ・障害のある方も参加できるワークショップの継続実施 ・収蔵作品の新たな活用法を打ち出す中で、新規観客層の開拓	○川崎市市民ミュージアムでは、事業の守備範囲が広いこともあって、様々な教育普及事業が行われている。教育普及事業担当の専任職員が配置されてから、徐々に若い層をターゲットにした参加型の事業やイベントの開催など「市民参加事業」の充実が図られつつある。	○市民ミュージアムの教育普及事業には、まだ多くの事業展開の可能性と改善の余地がある。館のスタッフやボランティアの整備により体制の整備を図るとともに、教育普及事業として重視する事業の内容と範囲を重点化することにより事業の充実を図ってほしい。	A
	(3) ボランティア組織の拡充と、主体的な活動を支援するための体制を整備	(3) ①登録者の拡大と、ボランティアの自主的な活動のために新たに企画・運営グループを立ち上げ ②ボランティアによるママカフェの継続実施	(3) ①ボランティア登録者数56名 ・ボランティア主体の企画・運営グループ立ち上げ、新年度に向けて「博物館展示ガイド」の研修中 ②保護者、ボランティアスタッフともに協力して進め、参加状況は定着しつつある、多い日は20組近くが参加 ・ベビーカーツアーの試行	(3) ①【成果】ボランティアの活動が定着しつつあり、事業の幅が広がる 【課題】登録者の拡大 ・ボランティアによる「博物館展示ガイド」を軌道にのせるための体制整備 ②【課題】内容の充実と参加者を他の事業につなげていく仕組みづくり	○ボランティア制度の創設から比較的短期間で、市民ミュージアムのボランティア制度が定着しつつあること、更にボランティアの独自の活動として「展示ガイド」などが開始されたことを評価する。	○ボランティア制度を充実していくためには、ボランティアの活動目標の設定とそれにもとづく年度毎の事業内容の重点化が必要である。活動目標や事業内容については、市民ミュージアム内で十分議論し、市民ミュージアムとボランティアが更に一体になって取り組み体制ができることを期待する。ボランティアは、ミュージアムの人材であることに鑑み、市民ミュージアムでは、ボランティア活動に従事する方々の意欲が高まるための仕掛とスキルアップのための仕掛の設定に十分留意してほしい。	A
	(4) 等々力緑地内の施設及び事業、イベントとの連携強化	(4) フロンターレ展の実施やアリーナで開催の環境技術展に協力	(4) フロンターレ展の開催、環境技術展への協力は予定通り実施 ・スポーツイベント、区民祭などで参加者の企画展観覧の無料、割引などを実施したが反応はほとんどなし ・アリーナで開催の成人式に運動して、館内で成人記念撮影のサービスを実施	(4) 【課題】等々力緑地再編整備計画との連動と集客に繋がる連携施策を今後も検討	○等々力地区には、認知度の高い施設が多くある。それらの施設との連携・協働は、市民ミュージアムのウィングを広げる意味でも重要なことである。各施設との連携が強化されてつつあることを評価する。	○アート鑑賞やスポーツ観戦が終わった後に、等々力地区やその周辺でどのように楽しんでもらうか、行政、商店街等と協議する場を設け、等々力地区とその周辺での滞在時間が増える方策を研究してほしい。市民ミュージアムを訪問する前後に楽しめる空間と時間の過ごし方を提示することは、市民ミュージアムの利用者の増加にもつながる。	B

市民ミュージアムの重点目標	重点施策	実施目標(到達レベル)	内部評価(自己点検)		外部評価		
			事業実績	成果と課題	評価できる点	今後取り組むべき課題等	評価
Ⅵ. 市民ミュージアム改革の推進	(1)第2次改革基本計画、及び今後の管理運営体制の検討	(1)関係部局とのプロジェクトにおいて、改革検証と市民・こども局への移管目的を踏まえて計画を検討、あわせて以後の管理運営体制を検討	(1)サマーレビューで23年度以降の市民ミュージアムの“めざす姿”のコンセンサスを得て、これに基づき「今後3年間の取組方針」を策定し庁内でオーソライズ	【課題】“めざす姿”の実現に向けて、運営状況の評価と改善及びそれに関する情報の提供を積極的に進めながら、第2次基本計画で定めた取組みを着実に果たす	○重要施策の立案、タイムスケジュールの管理、評価などPDCAサイクルが確立され、目標管理態勢が確立してきた。実効性も一定の水準が確保されている。	○制度が整備され、制度に基づいて運営がなされるようになった後に継続して改革を推進していくためには、設置者のガバナンス、館長のリーダーシップ、館員の自覚的行為が不可欠である。今後も、設置者と館で、館のミッションを確認するための努力を続けてほしい。	A
	(2)市民ミュージアム評価制度の活用による業務の質の向上	(2)評価結果を企画立案や業務遂行に反映する仕組みの定着	(2)21年度評価結果を局・館内で共有し、22年度事業や23年度の運営体制に反映		○外部評価が始まったことにより、市民ミュージアムのミッション、パフォーマンスの実情(実績)等が広く公開されるようになり、外部から「見える」状態になってきたことは、評価制度の効果と考える。	○現在の外部評価制度は、平成22年度で終了する。今後、市民ミュージアムでは、博物館の評価制度が博物館法によって制度化されていることを踏まえて、市民ミュージアムの実情に一層適合する評価制度を構築することを期待する。 ○評論家、ジャーナリスト(メディア関係者)やコピーライター等の意見を汲み取ることを期待する。	A
	(3)活動・運営状況の開示を推進	(3)ホームページを中心に恒常的に開示	(3)ホームページの活用による開示を継続実施		○外部評価の仕組みや結果が、市民ミュージアムのホームページにより広く公開されていることには大きな意義がある。		A
	(4)生涯学習財団への委託業務を円滑に進めていくための体制を整備	(4)業務遂行上の課題抽出と相互確認、解決のために財団本部との定例協議を実施	(4)学芸業務と管理運営体制のそれぞれで定期協議実施		○異なる身分・背景をもつ職員や異なる業務に従事する職員が、市民ミュージアムのミッションを達成するために一致協力するためには、様々な面でコミュニケーションを深め、目標の共有化を図ることが極めて重要である。定例協議の実施を評価する。	○川崎市役所、市民ミュージアム、学芸業務を委託されている生涯学習振興財団、市民ミュージアムの業務を受託している全ての業者が、市民ミュージアムのミッションの達成と業務改善のために更に意思疎通を図っていくことを期待する。	A
Ⅶ. ●市民の支持、理解を得られる効果的・効率的な運営	(1)市民ミュージアムの収蔵品を有効に活用した展示・上映、アウトリーチや収蔵品の館外での展示・貸出しの実施により、市民還元と市民ミュージアムの効果的なアピールを推進	(1)①博物館部門の企画展「絵図展」・「昔のくらし」などの上映ほか、美術館部門のアートギャラリーや映画上映などで活用・アピール ②企画展に連動した市民館での出張講座、ミュージアムでの出張展示、学校への出張授業等を実施	(1)①「絵図展」「昔のくらし」などの企画展、ATG作品・記録映画「セルレバス」などの上映ほか、収蔵品を活用した事業企画を推進 ②「マガジカバー展」「石渡風古展」「佐藤惣之助展」など収蔵品による館外展覧会を実施 ・「絵図展」において、各区の市民館で関連講座を開催 ・中原、宮前、多摩、麻生の各市民館における市民自主学級に講師として協力	(1)【成果】それぞれの事業で市民ミュージアムの存在や活動、収蔵品の質の高さをアピール ・「絵図展」の館外での講座は定員の倍を超える応募があり盛況 ・市民学級とともに始めてミュージアムの事業に参加する人も多く、ミュージアムの認知に貢献 【課題】市民ミュージアムがもつ収蔵品の価値や多様性を広く発信していくための収蔵品データの整備充実	○市民ミュージアムのコレクションを館の内外での展示や館外での事業、他館への貸出しにより、多くの人々に見てもらうために、様々な取り組みを行っていることを評価する。	○ミュージアムの収蔵品のデジタルデータベース化は、最重要課題の一つと考える。ネット化が進む社会で、ミュージアムの運営にとっても、今後の観客動員のためにも、デジタル化とネット上の情報発信はミュージアム活動の根幹である。ミュージアムが観客にとって魅力的で、インタラクティブな活動を実施するためにも、デジタル化に積極的に取り組んでほしい。 ○川崎市が取り組む記念イベント(例：二ヶ領用水竣工400年、久地の円筒分水70年、岡本太郎生誕100年)の中には、市民ミュージアムのコレクションを活用する機会になる可能性があるものがあると思われる。市民ミュージアムからも積極的に働きかけて、市民ミュージアムの存在感を高める機会にしてほしい。	B
	(2)来館者への人的な対応や館内外の案内表示・導線の改善、レストラン・ショップなどの付帯施設のサービス改善指導を恒常的にを行い、顧客満足の向上を目指す	(2)①エントランスに案内要員を配置 ②館内案内表示をすみやかに変更する体制の整備 ③小杉駅表示看板の見直し ④委託先を含めた職員の接遇研修や、ショップ・レストランの品揃え(メニュー)の見直し等を実施 ⑤アンケート集約方法の見直し	(2)①エントランスの案内ブースを入口前面に移動し、案内要員を固定配置 ②エントランスホールの企画展等の案内表示を作成 ③JR武蔵小杉駅の案内看板を市民団体の協力により一部改修、老朽化した大看板は全面改修に向けて23年度予算で要求し実施予定 ④レストランでは企画展にあわせて特別メニューを提供 ・ショップの現運営事業者が、23年度末で辞退することとなり、既存業者との取引の中止・清算及び新規運営事業者を募集 ⑤今年度上半期に寄せられた利用者の意見や感想を集約し、改善状況などをミュージアムニュースに掲載	(2)【課題】エントランスの案内表示は見やすぐ分かりやすくなったが、今後も他の表示等について工夫改善を図る ・ミュージアムの集客や魅力の向上に寄与する新規運営事業者を決定し、新装オープンを目指す ・これまで一方通行だった利用者の意見や要望に対して、返信を行うことにより市民の声を活かしたサービスの向上に努める	○エントランスの案内スタッフの配置場所の移設を始め、観客への各種の案内について、改善が進んでいることを評価する。また、各種の資料を制作・配付することにより、観客に情報提供をしようとしている姿勢や来訪者にバスの乗車時間をきめ細かくアナウンスしている取り組みを評価する。 ○武蔵小杉駅の市民ミュージアムの看板を、外部団体のご協力によりリニューアルできる見通しがたったことは大変喜ばしい。 ○レストランがミュージアムの展覧会にあわせてメニューの開発やお手頃な価格でバリエーションのあるメニューの提供により、利用者を増加させていることを評価する。	○市民ミュージアムの事業の範囲が多岐にわたり、館の案内表示や事業の広報には、苦勞が多いと思われるが、デザイン性や統一感にも十分留意しながら、インパクトのある広報になるように今後も改善に取り組んでほしい。 ○ミュージアムショップは館のイメージをかたちづくる上でも重要な要素とも言えるので、業者の入れ替えにより、「良くなった」との評価が得られるように努力してほしい。	A
	(3)施設・設備の有効活用のために、貸館事業の体制を整備してその拡大を図るとともに、館内諸室の使用状況を改善	(3)貸館の専任を置き業務を集約、引続きPRIにつとめ使用団体の前年増を目指す	(3)企画展示室の貸館は新たに一般美術団体3団体が利用、ミュージアムギャラリーとあわせて12月末までで使用料2,040千円(前年456千円)、入場者数15,621人(前年11,561人)といずれも前年から大幅増	(3)【課題】ミュージアムギャラリーの稼働日数は開館日数の4分の1程度で前年と変わらず、稼働向上の体制づくりが必要	○館の施設の貸出により、収益をあげていることを評価する。	○ミュージアム・ギャラリーの稼働率をあげるためには、美術大学、美術サークル、美術家個人や団体へのアプローチなどターゲットを絞った広報が重要と考える。あわせて、市民ミュージアムを利用するにより、利用者のメリットが増えるような仕組みも検討してほしい。	A

22年度 展示・上映 等

展示会名・会期・会場	内容	目標		数値実績		内部評価(自己点検)		外部評価		評価
		入場者数	入場者数	集入(千円)	集入(千円)	成果と課題	評価できる点	今後取り組むべき課題等		
横山裕一展 4月24日～6月20日 企画展示室1:有料	「漫画」を表現方法として選り、「ネオ漫画」ともよばれる独創的な作品を数々の展覧会で発表し、高い評価を得てきた新進作家の初めての大規模個展として企画。	5000	5587	7080	1912	よいタイミングで収集した作家の個展を、よいタイミングで開催。また広報と展示デザインに力を入れたことで、新しいイメージの展覧会に。この点により多くのメディアから盛んに取り上げられ、館の知名度を上げ、イメージ向上に役立った(掲載記事、特集等96件、TV・ラジオ等放送5件)。ショップでの売上好調(関連商品約300万円、ショップ全体で前年度比162%)。このような入場料収入ではなく物販での収益が見込める企画の正しい評価を望みたい。反省点としては準備期間が短く巡回展が企画できなかったこと、予算減のため広報の限度があったこと、正式な図録が作成できなかったことの3点。	<展覧会全般> ○年間を通して、一定の水準をもつ、多様な内容の企画展が数多く開催されていることを評価する。	<展覧会全般> ○存在感が際立つ展覧会、市民ミュージアムにしかない独自性を強くアピールしている展覧会がもっとほしい。他館との違いをアピールする展覧会の実現に向け、館をあげての戦略をつくること、市民ミュージアムの中長期的な課題であると考えられる。	○入場者の目標数に対して、実績が下回っているものが多い。目標が達成できなかった原因は、企画自体にある原因がある場合も考えられるが、展覧会のタイトル、目玉作品の不在、広報の不備、ポスターやチラシのデザインや内容によるもの等、様々な要因が考えられる。学芸部署を中心に、各企画展について十分点検してほしい。点検は、各種の基本データ(観客のアンケート、聞き取り、有料来館者率、曜日・天候による来館者の動向、男女比、年齢層、外国人、マスコミ報道の文字数と件数、入場者グラフとマスコミに取り上げられた状況との相関関係、来館者をサンプリングしての館内滞留時間の計測、展示を見終わった後の意見聴取などのデータ)を十分活用して、総合的・客観的に実施することが重要である。 ○企画展の数が多くもあって、展覧会の開催期間が短期間になっている傾向が見られる。集客が目標に達しないのは、会期自体が短いこと、そのため告知が十分でないことにも原因があるとも考えられる。企画展以外のイベントの実施も増えているので、企画展の会期をもっと長くして、各展覧会の告知をもっと充実させることが必要である。 ○展覧会の質を高めるために、開催数を絞り込んで、その分、展覧会の内容面の充実を図ることも今後の展覧会戦略として考慮すべきことである。 ○サブカルチャーを扱う展覧会の開催や市民ミュージアムの空間を使用したアート・イン・レジデンスについても検討してほしい。 ○実験的試みも臆することなく続けていくことが必要である。	
企画展 絵図でめぐる川崎 7月17日～9月5日 企画展示室1:有料	都市化の波にもまれながら変貌していく都市・川崎の景観を、市民ミュージアムにこれまで寄贈されてきた江戸時代の絵図を中心に、現在の地形図や航空写真などと対比しながら紹介する。景観の変化を視覚的に展覧することにより、地域の今を考える機会とする。	5000	3562	6845	1080	目標の7割の入館者数だった。収支比率は15.8%。収蔵品の絵図を多く展示することができた。これにより資料を収集し保管するといった博物館の役割を理解してもらう機会になった。また関連事業としての絵図散策や連続講座も好評であった。一方で、見込み人数からみて、入館者数が伸び悩んだ。新聞をはじめメディアの露出がとても少なかった。	○全国から多くの人が入館する等、人の移動の激しい川崎市では、地域の成り立ちを理解してもらう機会を市民に提供することは市民ミュージアムの重要な役割である。その意味で、川崎市の歴史、成り立ちを絵図を通して理解してもらう企画は意義があった。貴重な絵図が展示され、過去と現在との違いなど興味深く見ることができた。 ○会場に用意された「おてもとマップ」は展示を見る際に便利なツールであった。高齢者が増える中でこのような配慮は重要である。また、市内の7区で実施した連続講座も評価できる。	○入館者数を増加させるためには、タイトルや開催時期の工夫の他に、学校との連携がもっと必要であった。	企画展全体でB	
まど・みちお展 8月21日～10月3日 企画展示室2:有料	作家は、童謡「ぞうさん」「やぎさんゆうびん」などの作詞者として、またユニークな絵画を数多く描く画家としても知られ、100歳になる現在も旺盛な詩作活動を続けている。川崎市に長く在住するゆかりの芸術家であり、市民からの強い要望を受けて開催の運びとなった。	10000	8377	5457	1767	川崎市在住の著名な詩人の知られざる画業を紹介する展覧会として注目され、主要紙に取り上げられた。作家作詞の校歌・園歌に関する参加型イベント、詩の読み聞かせのイベント、感想文・感想画の展示など、子どもから大人まで幅広い層が楽しめる機会を設けて、関連イベントに1767人の参加を見た。酷暑のなか、来館者目標に到達できなかったが、館内に賑わいを見せた。会期末に、皇后陛下の行啓を見た。	○詩人として知られている作家の画家としての一面を知ることにより、作家の全貌が理解できる展覧会になった。話題性がある企画だったこともあり、関連イベントも盛況であった。	○8月、9月は例年になく残暑が厳しかったため、観客動員に影響があったと考えられる。川崎市ゆかりの作家で集客力も期待できることを考えれば、秋(10月～11月)に開催するということも考えられた。		
アイヌ・美を求める心 9月18日～11月7日 企画展示室1:有料	(財)アイヌ文化振興・研究推進機構との共催企画。白老のアイヌ民族博物館が所蔵する北海道アイヌ資料を中心に、衣装や装身具・木工品などに見られる伝統的な文様の美にスポットをあてて展示する。	5000	4098	1,430	787	入館者数は目標の5000人を下回った。収支比率は55%。本展はアイヌ文化の振興と理解の促進を図ることを目的として開催され、北海道白老のアイヌ民族博物館をはじめ、尾張徳川家関連のアイヌ資料を初公開するなど、350点もの貴重な資料・作品が展示された。展示内容に関しては、高評価を得たが、17年度に開催されたロシア民族学博物館所蔵アイヌ展の入館者数(8000人)の半数にとどまった。前回と比較して、マスコミや各種団体、学校などへの広報活動、働きかけが弱かったことが反省点である。	○展示作品が素晴らしかった。展示方法にも、染色・服飾関係の立体的な展示や住居の復元など優れたものがあつた。また、関連イベントでは、市民ミュージアムの特徴がでていたと思う。	○全国に巡回する展覧会ということもあって、市民ミュージアムで行う展覧会としての特徴がもうひとつ出せていなかった。展示資料の中に本州では初公開のものがあつたが、観客にもっとアピールすべきであった。映像資料(徳川家関係)は興味深い内容であつたが、更に大きなモニターの使用、観客へのアピール方法に工夫がほしかった。 ○入館者数を確保するためには、マスコミ等への働きかけがもっと必要であった。会期が短いこともあって、十分な広報活動ができていなかった。展覧会開始前、開始直後、中盤、終わりと数回に分けてイベントを開催し、告知し、集客する必要があつた。		

展覧会名・会期・会場	内容	目標	数値実績			内部評価(自己点検)	外部評価		
		入場者数	入場者数	歳出(千円)	歳入(千円)	成果と課題	評価できる点	今後取り組むべき課題等	評定
木村伊兵衛写真賞 35周年記念展 11月13日～1月10日 企画展示室1:有料	写真界の芥川賞といわれる「木村伊兵衛賞」の35年の歩みを紹介。市民ミュージアムでは主催の朝日新聞社より受賞作品の寄託を受けており、35周年という節目の年にこれまでの受賞作品を公開する。	9000	3553	8530	1019	近年増加しているシニア世代の写真愛好家が展示解説を熱心に聞いて下さった(40～50人/回)。さらに解説を増やしたい。ツイッターやネット上での広報を増やすことで若い世代に展示をアピールした。	○見応えのある写真が多数展示されて、作品を通して、日本の戦後の写真の歴史や理解する上で良い企画であった。 ○ツイッターやネットでの広報は評価できる。	○ツイッターやネットでの広報は、今後も実施してほしい。	企画展 全体で B
川崎フロンターレ展 12月11日～1月10日 企画展示室2:有料	フロンターレの今年1年間の活躍を写真、映像、資料などで回顧。ファンサービスに主眼をおいた毎年恒例の展覧会。会期中には選手のトークショーのほか関連イベントも開催。	7000	5134	1756	204	今年で9回目となり、リーグ戦終了後のチームを応援する展覧会としてサポーターの間で定着してきた。マンネリ化に陥らないように、展示の手法と内容に工夫を加えた。協力会社の協力で写真サイズを昨年より大きくすることができ、見やすくかつインパクトのある展示となった。	○地元のサッカーチームのコアなファンを対象にした展覧会で、ファンにとっては、楽しい企画になっている。ミュージアムに来館する習慣をもたない人に、ミュージアムに足を運んでもらう機会になっている。	○マンネリ化しないように留意しながら継続することが期待される。また、普段市民ミュージアムに馴染みのない方々に、市民ミュージアムの活動を広く知っていただく機会として積極的にとらえることが期待される。	
昔のくらし 今のくらし 1月22日～4月3日 企画展示室2:無料	生活用具の今と昔を市民ミュージアム所蔵品により紹介する展覧会。小学校3年生の社会科カリキュラムにあわせた内容となっており、縄文時代から現代にいたる生活用具を展示する。あわせて体験コーナーや関連イベントも実施する。。	8000	11436	2500	0	今年も学校給食のコーナーを設け、時代ごとの給食を展示するとともに、レストランと連携を深めた。また市内外の小学校12校の見学があり、定着した感がある。また今年から民家の囲炉裏も再現し、生活道具とともに生活空間も味わえる展示となった。	○市民ミュージアムの定番企画になってきた展覧会である。回を重ねる毎に変化と進化してきている部分があり、見飽きない。ボランティアによる解説もあり、展示を見ることにより、世代間の会話が進むなどの効果をうんでいることも評価したい。	○現在は、時間の経過とともに「昔」になる。現在、日常生活で使用している品々をミュージアムの収蔵品として収集・保管するための取り組みを充実していくことが期待される。川崎市には、大手の家電メーカー等もあり、企業等の協力を得ることにより、収集活動を充実していくことも期待したい。	
市美展 2月5日～2月26日 企画展示室1:無料	21年度から、会場を従来のアートガーデンかわさきから市民ミュージアムに移して開催。それを機にいくつかの課題を改善。2回目の開催となる本年度は改善点をさらに深化する。	8000	8774			重点目標Ⅲ-(2)に記載	○市美展を川崎市市民ミュージアムを会場に開催することは、市民ミュージアムの存在理由を高める点でも意義がある。	○市美展が川崎市から国内外に向けての情報発信のための戦略的な企画になるように、これまでの内容・方式にとらわれることなく、一層大胆に改革していくことを期待する。	
かわさき発ガラス作家展2011 3月5日～27日 企画展示室1:無料	経済労働局との連携企画。川崎のガラス産業振興の取組みの一環として、東京ガラス工芸研究所(川崎区)の開設30周年を記念して、同所の卒業生を中心とした展覧会。関連ワークショップなども開催。	4000	2001	176	0	企画1で研究所30周年展、ギャラリーで卒業生展と市内工房展の2つを同時開催した。展示などは経済労働局の委託業者が行い、ミュージアム側は展示室利用にあたっての指導そのほかにあたった。会期中に東日本大震災が起き、ワークショップの中止など入館者数にも少なからず影響が出た。	○ガラス関連の一大集積地である川崎市の特徴を文化資源として活用する点で大きな意義がある展覧会である。	○今後も継続して実施することが期待される。	

展覧会名・会期・会場	内容	目標	数値実績		内部評価(自己点検)	外部評価			
		入場者数	入場者数	歳出(千円)	歳入(千円)	成果と課題	評価できる点	今後取り組むべき課題等	評価
							<p><常設展全般> ○我が国の博物館は、企画展に注目が集まる一方で、常設展は閑散としている傾向が見られる。博物館の顔とも言うべき常設展が魅力的になることが課題になっている中、市民ミュージアムのコレクションを活用した展示は、成果をあげつつある。館のコレクションによる展示は、学芸員の工夫が見られ、魅力的な展示が多い。</p>	<p><常設展全般> ○市民ミュージアムのコレクションを活用した展示が更に充実・強化されることを期待する。既に行われている「ミニ企画展」「特集展示」をベースにして、館のコレクションの見せ方を工夫し、新たな常設展のスタイルを確立してほしい。</p>	
博物館展示室	川崎の考古・歴史・民俗資料を展示する常設展に加え、毎月テーマを定めて収蔵品を紹介する「マンスリー展示」を開催。				<p>マンスリー展示は、毎月の月替わりで12回行った。また文化財課との連携で、新指定となった収蔵品のミニ展示を行った。収蔵品を広く知ってもらう機会ができた。実質的な観覧者数は不明であるが、広報を含め今後も定着させ実施していきたい。</p>	<p>○展示替が難しい博物館スペースで行われている「マンスリー展示」は、地域に密着した良い企画で、丁寧な解説もよい。</p>	<p>○「マンスリー展示」は、マンネリに陥らないように、新鮮な展示に心がけてほしい。また、博物館スペースについては、開館後20年を経過していることを考えれば、リニューアルが必要な状態になっている。リニューアル計画について、川崎市と協議しながら、できるだけ早期に見直しをたててほしい。</p>	A	
常設展	<p>写真・グラフィック・漫画・川崎ゆかりの作家など美術館系の収蔵資料を、年間4期にわけそれぞれテーマを設けて紹介。</p> <p>・横山裕一関連展示</p> <p>・木村伊兵衛写真賞35周年関連展示 (第1回以降の受賞作品を4期に分けて展示)</p> <p>・マガジカバーの世界展</p> <p>・漫画収蔵品展</p> <p>・佐藤惣之助</p>				<p>・収蔵品をさまざまな角度から紹介することができ、コレクションの特徴を活かしたミュージアムらしい展示を行うことができた。</p> <p>・企画展横山裕一展と連携し、横山裕一の関連資料である写真やグッズなどを紹介、企画展室からの望ましい導線を作ることができた。</p> <p>企画展の木村伊兵衛写真賞展と連携した展示を年間を通して行うことができた。・無料ゾーンで監視がいないため、作品が小学生によって破損させられた。企画展示室2で展示できれば問題は生じなかった。</p> <p>・未整理だったマガジカバーの資料を整備し印刷技術という観点を取り上げて紹介することができたばかりか、ミュージアムにも巡回することができた。</p> <p>・「まんが」といわれるジャンルの展示方法に着目し、その多様性と広がりを紹介することができた。</p> <p>・作詞家と知られる佐藤惣之助の詩人としての姿を収蔵品で提示することができた。 ・佐藤惣之助の資料を紹介し、映画上映とも連携したばかりかアートガーデンでも展覧会を開催することができた。</p>	<p>○アートギャラリーの展示は、水準の高いものが多く、市民ミュージアムの特色がよく発揮されている展示になっており、楽しめるものが多い。</p>	<p>○館のコレクションの展示を市民ミュージアムの特徴・売りになる展示にするために、更に何をなすべきかを検討してほしい。現在はアートギャラリーの展示は、全て無料にしているが、有料の企画として行う方向もあるのではないかと考える。アートギャラリーの展示は無料という方針を維持するのであれば、企画展示室での有料企画にした開催も含めて検討してほしい。</p> <p>○アートギャラリーの展示は、ギャラリートークにより展示作品の魅力が高めることができるものが多い。企画展を含め、ギャラリートークをもっと頻繁に、定時実施ができるように努力してほしい。</p> <p>○展示資料が事故に遭わないための対策(鑑賞マナー教育を含む)を速やかに検討・実施してほしい。</p>	A	
アートギャラリー	<p>・メディアとアート</p> <p>・久保一雄展</p> <p>・宇野亜喜良のポスター展</p> <p>普及活動について</p> <p>広報について</p>				<p>・写真、美術文芸、漫画、グラフィックに加え、ジャンルを横断したメディアとアートのシリーズを昨年に引き続き開催することができた。 ・メディアアートの現代作家の作品は子供にも人気だった。</p> <p>・映画の美術監督である作家のデッサンに着目し絵画展を行うことができた。</p> <p>・収蔵品を活用し日本のグラフィックデザイナーのシリーズを今年も開催することができた。</p> <p>・各ギャラリー展で解説を定例化して回数を増やすことで、参加する来館者も増えてきた。</p> <p>・1回毎にチラシをつくり、広報力を高めることができた。 ・チラシにデザイナーを入れ、ゲートパナーの看板とデザインを統一して、視覚的にアピールすることができた。また若手デザイナーに依頼することで、比較的低価格のデザイン費用で大きな効果を上げたばかりか、若手デザイナーの育成にも役立った。 ・展示を分かりやすくみていただくためのガイド「あるきかたガイド」を作成した。</p>		<p>○複数のジャンルをもつ市民ミュージアムでは、館内で多様な事業展開が可能であることから、連携企画が増えている。連携企画の実施を観客に効果的に伝える広報の在り方をよく研究してほしい。</p> <p>○展覧会その他の事業が多いこともあって、市民ミュージアムが伝えたいこと、観客が求めている情報がわかりにくくなっている。市民ミュージアムがアピールしたいもの、観客の求めているものを十分整理し、「選択と集中」により、館のメッセージを伝わりやすいものにしていくことが重要である。</p> <p>○館の認知度を高める至上のテーマを実現するために、多様な内容を個別に複数の「ちらし」にしてほしい。また、広報の効果を高めるために、他の博物館や大学(とりわけ美術系)等に配付するちらしの量を増加する必要がある。</p>		

	展覧会名・会期・会場	内容	目標	数値実績				内部評価(自己点検)		外部評価		
			入場者数	入場者数	歳出(千円)	歳入(千円)	成果と課題		評価できる点		今後取り組むべき課題等	評価
映像	映像ホール:有料	土日祝日に映画を定期上映(1日2本が原則)。基本的に半月単位で俳優、監督、原作者、時代など多様な切り口で特集を組む。収蔵品だけでなく、配給会社からの借用も含めてプログラムを構成。	15100	13645	11340	5038	<ul style="list-style-type: none"> ・成果:シリーズとして展開している「川崎ゆかりの映画人」特集で、今年度は女優・川崎弘子の特集を実施。 ・また民族文化研究所・姫田忠義氏のアイヌ文化を撮影したドキュメンタリーを、展覧会「アイヌ-美を求める心」展の関連上映として開催した。 ・上映に合わせたトークショーを実施。*「詩人 佐藤惣之助」展関連上映時:帝塚山学院大学教授・山田俊幸氏 *「蘇る登戸研究所」上映時:明治文学部講師・渡辺堅二氏+教育サポートセンターNIRE代表・中塚史行氏+映画監督・伊藤宏一氏 *「脚本家 馬場当」特集上映時:馬場当氏+山田洋次氏+いまおかしんじ氏、篠田正浩氏 ・課題:大学生を中心とした若年層をいかに顧客獲得していくかが大きな課題となっている。日本映画大学設立・市民子ども局の映像教育の取り組みなどと運動して若年層に訴求するプログラムの立案や、映画館体験の周知に今度努めていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ○他館にない市民ミュージアムの特徴で、売りになる企画が多い。時代を映す企画、社会的にも大変意義のある企画が多く、また忘れ去られがちな近現代史の負の部分もていねいに記憶される場としても貴重である。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ミュージアムでの映画上映は、展覧会に比べ観客の認知度が低いので、効果的な広報を工夫してほしい。 ○映像施設に親しみやすい愛称をつけて、市民ミュージアムが映画館でもあることをアピールしてほしい。 ○映像作品の中から観客が見たいものを選んでもらうなど、観客とのコミュニケーションを深める運営に努めてほしい。日本映画大学の設立を契機に更に飛躍することを期待する。 	A		
	ミニホール:無料	「牛山純一のドキュメンタリー」「祭りのビデオ」を月1回定期上映。市民との協働で「みんなでビデオを見る会」を月1回定期で開催。	1200	1876	140		川崎市民俗伝統保存協会の協力で解説してもらい、地域との連携ができた。若年層の参加が少ないのが課題。		○ミニホールの企画の周知をもっと工夫してほしい。			